

地名漢字「須磨」を用いた景観文字の研究

岡墻裕剛

笹原宏之(2013)『方言漢字』(角川学芸出版)が「方言漢字」と呼ぶように、漢字には地域や位相によって字種・字体・用法・音訓等に変種が存在するが、當山日出夫(2013)「景観文字研究のこころみ―「祇園」の経年変化を事例として―」(高田智和・横山詔一編『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』, 彩流社)は非文献資料である看板・道路標識・地名表示といった「景観文字」の中で同じ地名に複数の字体が使用されることを指摘する。

岡墻裕剛(2018)「神戸市須磨区における方言漢字「磨」の研究」(『神戸女子大学文学部紀要』51)は、歴史的文献とともに神戸市須磨区の歌碑類と地域住民の手書き文字を調査し、「磨」の略字としての「𠂔」が室町時代より現代に至るまでこの土地で頻用されることを示した。これに続き、「須磨」の「須」字種について調査を行い、その結果を報告する。

結論としては、この字種は、初唐標準字体「湏」と開成標準字体「須」とに大別でき、日本では長らく「湏」が優勢であったが、現代の手書き文字では「須」が定着している。一方で、景観文字では「𠂔」に作るものがあり、行書体では「𠂔」と併せて「𠂔𠂔」とする例も多い。さらに、この行書体の字形を元に楷書化されたと見られる「東次摩村」なる表記が確認された。